「命」の講話　令和元年六月十一日（火）

彼が亡くなって二十三年が経った。平成八年五月十五日（水）、彼は、ランニング中に倒れ、亡くなった。生きていれば三十六歳、彼の人生は、たった十三年、中学二年で、突然、幕を閉じた。

彼は勉強が苦手だったが、正義感が強く、いつも「静かにせれぇ！」と叫んでいた。体は小さかったが力が強く、相撲も強かった。でも、走るのは遅かった。いつも額に汗が浮かぶほど、一生懸命に掃除をした。何より、皆に好かれていた。

彼は五月に亡くなったが、月に一度の席替えの度に、彼の机も飾られた写真と一緒に移動した。もちろん、九月の修学旅行でも一緒だった。それは、誰が言うでもなく、当然のように、卒業式の日までの二年間続けられた。

人は、何の前触れもなく、突然、いとも簡単に命の火が消えてしまうことがある。**明日もここに居るという保証は誰一人持ってはいない。**病室の外まではっきり聞こえる、彼の名を叫ぶ兄弟の声。お通夜から葬儀まで、服も着替えず、食事もとらず、彼に添い寝をして離れようとしないお母さんの姿。黙ってうなだれるお父さん。亡くなった翌日の教室の静かさと、魂をどこかに置いてきたような生徒たちの顔・・・・どうしても忘れられない。

家族が亡くなるというのはこういうことなのだ。友達が、教え子が亡くなるというのはこういうことなのだ・・・。人が亡くなるというのはこういうことなのだ。そして、それは、何の前触れもなく、突然やってくることがある。

その日から三年が過ぎた夏。甲子園の長崎県予選を報じる新聞で、ある言葉を見つけた。

**「この季節になると、何故か胸がキュンとする」**

投稿者の名前に釘付けになり、涙があふれた。彼の母だった。夏の甲子園が近づくと、野球部員だった彼のことを思い出すのだろう。

「この季節になると、何故か胸がキュンとする」

彼には「夢」があった。それもでっかい夢だった。別に、夢の実現にむけて、たゆまず努力を続けている訳ではなかったが、よく「・・・になる！」と言っていた。

「夢」があったから、十三年しかなかった人生だったけれども、「楽しんで生きた」と思いたい。「夢」も持たず、何十年生きるより充実していたと思いたい。**「夢を追いかけることこそが、生きることなのだ」**とさえ宣言したい。

けれども、「生きてさえいれば・・・」という思いを捨て去ることもできない。私は、知っているだけで、五人の教え子たちに、先に旅立たれている。

いつ消え去るかわからない命。だからこそ一日一日を大切に、大切に、懸命に生きて欲しい。**疲れたら、ちょっと休んで、また始めれば、それでいい。**

二年前の二〇年ぶりの同窓会。彼の写真は中学二年生の笑顔そのままに、やっぱりそこにありました。